下級武士家庭におけるしつけと教育の男女による違い ―桑名日記を事例に―

渡邉　嘉慧
（鍛治　宏介ゼミ）

目　次

はじめに
第一章　桑名日記と渡部家
　第一節　桑名日記について
　第二節　渡部家について
第二章　鐐之助の教育
　第一節　両親の役割
　第二節　幼児期のしつけ
　第三節　教育の記事
　第四節　鐐之助の手習
第三章　平太夫とお増のそれぞれの役割
　第一節　平太夫と鐐之助
　第二節　お増と鐐之助
おわりに

はじめに

『桑名日記』は桑名（現、愛知県桑名市）に住んでいた下級武士渡部平太夫が記した日記である。本日記は、平太夫の仕事や生活、孫・鐐之助の養育について詳しく記された史料である。鐐之助の父・勝之助が記した『柏崎日記』と合わせて交換日記の役割を果たしていたため、『桑名日記』は柏崎で、『柏崎日記』は桑名でそれぞれ保管されていた。その後は両日記とも桑名に移され、何らかの事情で数人の手へと渡った後、昭和四十六年（一九七一）三月十七日に三重県教育委員会から文化財指定をうけた。現在『桑名日記』は、沢下春男氏によって翻刻され本文四冊と沢下氏が記した別冊の計五冊で刊行されている[1]。

「桑名日記」を取り扱った論文として、山本志帆子氏の「近世武家社会における待遇表現体系の研究：『桑名日記』にみる桑名藩下級武士を中心として」[2]は『桑名日記』の中で用いられる言語表現の違いについて指摘している。皆川恵美子氏は「『桑名日記・柏崎日記』に見られる子どもの遊び：下級武士の子どもによる遊びの諸相」[3]の中では、子供の遊びに着目している。

上記のように幅広い分野で研究されており、本論文でも扱っていく教育に関しては、松川由紀子氏が「桑名日記・柏崎日記にみられる近世庶民の家庭教育について」[4]の中で鐐之助の幼児期並びに手習へと移行していくなかで施される教育について述べている。平太夫とお増の鐐之助への接し方は「幼児の要求を受け止め、あるいは灸をすえてでも悪いことはいけないと納得させ、遊びの生活の中で次第に児童期の学習の生活へと導き、また、一貫して地域社会の中の子供として遊びの生活を大切に見守るなど、幼児教育、家庭教育の基本をしっかりと踏まえていることがわかる」と指摘している。

本論文では、『桑名日記』の中で平太夫とお増が鐐之助に対してどのような教育を施していたのかを見て行き、その上で養育における男女の役割の違いを検討していく。

本論文での『桑名日記』の引用は、文章中で（桑名日記〇、〇頁）で記す。また、本論文内での人物の年齢は、満年齢で示している。

第一章　桑名日記と渡部家

第一節　桑名日記について

『桑名日記』は、筆者である渡部平太夫が五十五歳（お増は五十一歳、鐐之助は三歳である。）の天保十年（一八三九）、養子である勝之助が柏崎勤務を言い渡され柏崎の地へと移る二月二十四日に書き始められ、亡くなる三日前の嘉永元年（一八四八）三月四日まで全四巻、九年間にわたって記された。⑤

内容をみると、その日の天気から始まり妻であるお増や孫の鐐之助その他渡部家の住人の様子や出来事、日々の蔵勤めでの出来事や藩から出された御触れの内容、周囲の人間について、桑名で発生した事件についてなど幅広くそして詳しく日記に記されている。『桑名日記』は、柏崎にいる勝之助とのいわば交換日記のようなものであったため、勝之助の妻おきくも読むことが出来るよう仕事関係の記事以外はなるべく仮名で書くよう努められているのも本日記の特徴である。

ほとんど日付けの抜けがないため、詳細に平太夫や鐐之助の様子を追うことができる。

第二節　渡部家について

家の場所は、八幡瀬古庚申堂北にあったとされる。渡部家は、藩中でも旧家の一に属し、旧家十八軒で家栄講を組織して時々会食をしていた。⑥

（1）渡部平太夫政通

桑名日記の著者。

渡部平太夫政通は、天明四年（一七八四）奥州白川松平藩士片山家に生まれ渡部家を継ぎ、文政六年（一八二三）、藩主松平定永転封の際、桑名に居住し家を矢田河原庚申堂北に構えた。妻お増との間に、女子は得たが男子は生まれず、実家である新地の片山家からその甥にあたる勝之助を養子に迎え、同じ藩士である新屋敷の佐藤家よりおきくを娶らせ、柳原の地に新居をもたせていた。

嘉永元年（一八四八）三月七日死去。

（2）お増

浅野家から平太夫の所へ嫁いできたか。本名はお増だが、桑名日記内では「おばば」と呼ばれることがほとんどで、名前で呼ばれることは少ない。

平太夫の死後、嘉永元年（一八四八）九月にお増と鐐之助は柏崎に移住している。文久二年（一八六二）二月二十六日に柏崎で、七十三歳で死去。

（3）勝之助、おきく、おろく

勝之助は、享和二年（一八〇二）十月十六日に、白河で生まれる。文政六年（一八二三）に桑名へ移り、天保十年（一八三九）正月の御役替で、勝之助は柏崎陣屋詰を拝命し、勝之助・おきく・鐐之助は平太夫の家に移る。二月二十四日に勝之助はおきくと鐐之助を平太夫の家に預けて柏崎へ単身赴任した。

おきくは三月十九日におろくを産むが、五月末日、鐐之助を平太夫に預けたまま一度桑名に戻って来た勝之助と共に柏崎へと移っていった。勝之助は、柏崎の地で元治元年（一八六四）十二月十二日に六十二歳で亡くなる。

おきくは、安政元年（一八五五）十月二十四日に第六子であるおてつを産み、翌日二十五日に三十九歳で亡くなった。

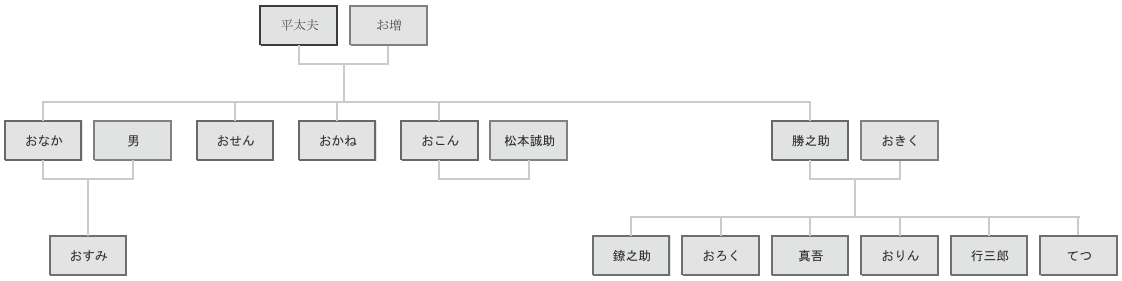

図１　渡部家家系図

おろくは、文久元年（一八六一）に桑名藩士山田行蔵のもとへ嫁いだが子は得られず、慶応二年（一八六六）に二十八歳で亡くなった。

（4）鐐之助

天保七年（一八三七）十二月八日平太夫の養子勝之助の長男として生まれた。勝之助の越後への転勤に際し、平太夫の家へ預けられた。弘化元年（一八四五）十月七日に禄之助と改名しているが、同年十二月二十日にまたもとの鐐之助へと戻っている。

嘉永三年（一八五〇）九月十一日に、二人扶持新郷足軽に召出され、安政二年（一八五六）三石を賜ったが、翌三年（一八五七）八月十九日に二十一歳で死去している。

表１　渡部家年表

年	月日	出来事
天明4(1784)		渡部平太夫誕生
享和2(1802)	10月16日	勝之助誕生
文政6(1823)		平太夫・勝之助、桑名矢田河原庚申堂北へ移る
天保7(1836)	12月8日	鐐之助誕生
天保10(1839)	正月	勝之助、柏崎陣屋詰を拝命
		勝之助一家、平太夫の家に移る
	2月24日	勝之助、柏崎へ行く
	3月19日	おろく誕生
	5月末日	おきくとおろく、柏崎へ
弘化元（1845）	10月7日	鐐之助から禄之助へと改名
	12月20日	鐐之助に名前が戻る
嘉永元(1848)	3月7日	平太夫死去（享年64歳）
	9月	お増と鐐之助、柏崎へ
嘉永3（1850）	9月11日	鐐之助、二人扶持新郷足軽に召出される
安政元（1855）	10月24日	おきく、おてつを産む
	10月25日	おきく死去（享年39歳）
安政2（1856）		鐐之助、三石を賜る
安政3（1857）	8月19日	鐐之助死去（享年21歳）
文久元（1861）		おろく、桑名藩士山田行蔵に嫁ぐ
文久2(1862)	2月26日	お増死去（享年73歳）
元治元（1864）	12月12日	勝之助死去（享年62歳）
慶応2(1866)		おろく死去（享年28歳）

（『桑名日記　別冊』を基に作成）

第二章　鐐之助の教育

第二章では、鐐之助の幼児期から手習いを始めるまでにかけて平太夫とお増がどのような教育・しつけを施していたのかを見ていく。

第一節　両親の役割

鐐之助が三歳の時に柏崎へと移っていった両親・勝之助とお菊は、勝之助が書いた『柏崎日記』を見ると鐐之助の事を常に気にかけていたことがわかる。鐐之助の誕生日には毎年赤飯と御酒を用意し、近隣の者を呼んでお祝いしたり、桑名から状が届けば安否を真っ先に確認している。

また、鐐之助が手習いを始めて清書をするようになると、その清書が状と一緒に封されそれを見た勝之助が周りの人にも自慢している様子も記されている。

天保十四年（一八四三）六月二十九日の記事で、桑名から送られてきた鐐之助の清書を見た勝之助の様子を見てみる。

鐐之助清書御遣し被下誠に見事出来まさか、ヶ様に者出来申間敷と存候所、天晴れ也。

上記の様に、見事な褒め様である。この日以外の記事でも、清書が届くたびにその出来に感心し褒めているのである。

また同年十二月十二日（柏崎日記中、一〇〇頁）には、勝之助は届いた状に一緒に封されていた鐐之助の清書を品川という人物に見せている。

鐐之助清書為見候処、手筋宜、後に者書き手に御成被成へしと感心被致候。

鐐之助の清書を見た品川は、鐐之助は将来良い書き手になるだろうと感心している。

両親は平太夫の教育方針について口を出して居る様子はなく、むしろ

祖父母に任せきっていたようである。その様子が分かるのが、天保十四年（一八四三）十二月十一日の記事（柏崎日記中、一〇〇頁）である。

　　鐐之助清書御遣し被下、天晴見事に出来驚入申候。此頃迄乳を呑居候様に存候所、はやヶ様に相成候とは、偏に御祖父母様方之御蔭と難有、おきくも誠に不思議之様存居申候。

つい最近まで乳を飲んでいたはずの鐐之助がいつの間にか清書をできるようになっている時の流れの速さを感じながら、このように成長できたのは祖父母のお陰だと記している。

しかし、鐐之助が手習いよりも遊びに精を出しているのには難色を示しており、弘化二年（一八四六）一月九日（桑名日記三、八五頁）に平太夫のもとに届いた状には、鐐之助に遊ぶより手習に精を出すように頼んでくれと言っている。

　　宵の内に書状日記を見る。皆々無事に而安堵。鐐に状を読聞せ、柏崎の子供は十才に而四書五経迄済たものか幾たりもあるから鐐之助殺生凧揚より書物と手習い精出し候様に頼と言て来た、若精か出ずはそう言てよこしてくれ、早速迎ひに行と言てよこしたかどふだと言たれは、是には甚当惑の顔色にて、溜息つき、毎晩御じいさ寝なへ寝なへと言奴か、洗湯へ行た留守にしほしほと寝せて貰ふたけな。

勝之助の唯一の懸念点は、鐐之助の手習への積極性であった。

第二節　幼児期のしつけ

第二節では、初めに平太夫とお増がどのようにしつけを行っていたのか、そして次に、平太夫とお増を含む鐐之助の周りにいた大人たちがどのように鐐之助と関わっていたのかを見ていく。最後に、鐐之助の誕生日について触れる。

（1）祖父母によるしつけ

中村は江戸後期に活躍した京都出身の漢学者で、『父子訓』は上巻「父之部」と下巻「子之部」から成る、父の心得と子の心得を併せて説いた教訓書である。中村は『父子訓』の中で、五六歳の頃から礼儀を教える様にと述べている。そして、七歳で男女一緒に遊ぶことを止めさせ、男女の別を学ばせるべきであるとしている。⑦

男女の別については日記の中では見受けられないが、礼儀の教育については書かれている。天保十二年（一八四一）一月十日（桑名日記一、一二四頁）、鐐之助が五歳の時である。家に来て居た浅野のおじいさという人物が鐐之助に何かくれるそうだから、「御めでたふ御ざりますと御じぎをしやれ」と平太夫が鐐之助に言うと、鐐之助はうろたえながらもにこにこと笑いながら言われた通りに「御めでたふ御さります」とおじぎをして、浅野のおじいさから菓子を貰っている。この記事以前には鐐之助にお辞儀をしろ、挨拶をしろと言っている記事は見受けられないため、五歳頃から礼儀について教え始めていることがわかる。

しかし、鐐之助が三歳の時から既に見様見真似か家に来た人に向かってお辞儀をしている記事もあるため、見様見真似である程度の礼儀作法は学んでいたのではないかと思われる。該当の記事は天保十年（一八三九）十一月十二日（桑名日記一、三五頁）である。

　　三わがいとまごひに見へる鐐こも出て御じぎをする。

鐐之助はとにかく元気があり余り毎日遊びに出かけ、わがままを言って周りの人を困らせることもしばしばあった。日記の中でも二人が鐐之助に対して、日に日に口がまわるようになり大口をたたくようになったり、わがままを言ったり、あれこれと欲しがるのには困らされる、と言っている様子が記されている。

　　鐐こ此あいだはりかふになり手のとどかぬとこへはひばこをもち出したんすのうへのものをとるやら中どこのうえへ上る。御ぶつだんへあがりとびおりるわるさをするにこまる。それにきものはよごす。

きせかへてあろふてほす。又よごすまたきせかへる。そのくせあたらしきものを着たがる。

（天保十一年（一八四〇）五月十三日、桑名日記一、七一頁）

鐐この手伝にはこまる。あまりげんきよすぎ、さわぐともさわぐともあさからばんまでおととひよりそばにつきどふし。おばばは大よろこび。

（天保十一年（一八四〇）十二月二十九日、桑名日記一、一二一頁）

困らされている内容を見ていくだけでも、鐐之助が日に日にできるようになる事が増えていっていることが分かる。特に多く見られるのは、口が達者になることで言うことを聞かなかったり、大口をたたくようになったりしていることに困る記事である。平太夫とお増にとってはどうしようもない悪坊主だったかもしれないが、元気に順調に成長している証拠とも言える。

そんな鐐之助に平太夫とお増は手を焼いているが、二人はどのように鐐之助にしつけを行っていたのだろうか。

何度注意されても悪さを止めない鐐之助が必ず悪さを止める言葉があった。それは、「越後へやるぞ」という脅し文句である。天保十一年（一八四〇）十月四日（桑名日記一、一〇二頁）に、鐐之助はお増に長吉の真似がしたいから髪に筋を引いてくれと頼むが、お増は家中の者が町の者の真似なんぞするものでないと言っている。それでもやりたいと言う鐐之助に対し、お増は言うことが聞けないのなら馬に乗せて越後へやって代りにおろくを連れて来て一緒に寝るからそうするがいい、と鐐之助に言ったため鐐之助は泣き出している。

鐐之助は越後へ行くことをとても嫌がっており、その理由は何かと鐐之助が悪さをするたびに越後の名を出すため、鐐之助は越後が悪い場所であると認識しているのだと天保十年（一八三九）十月十八日（桑名日記一、三〇頁）の条で記されている。

しんやしきのあねがにくいとてししやがこんなやくにもたたぬにくらしいねこだといわんしたら鐐このいふにはそんならお□にのしてえちごへやんなへといふたげなそれはどふいふ事だといふに鐐このわるさをしてしかたのなへときそのやふにわるさをするとえちごへやるぞとおばばがいふのをきひておるゆへそふいふたろうとえちごはどちらほどかわるい事□思ふていると□みなみな大わらひいたす

そのため、天保十三年（一八四二）十二月二十二日（桑名日記二、一一七頁）の条では、柏崎にいる鐐之助の父親である勝之助から状が届き父母そして妹の話になるが、鐐之助は両親・兄弟の顔を忘れたから顔を見たいと言う。平太夫がそれなら柏崎へ行くといいと言うが鐐之助は「おれはおじいさの子だから行かない」、と返事している。三歳で親と離れ一人祖父母の家に暮らし、二年も経った今では鐐之助の両親は実の両親ではなく、平太夫とお増であるという認識になっていることがわかる。

ここで一つ鐐之助の両親そして祖父母への認識について伺える良い記事がある。それは『桑名日記』が書き始められるきっかけでもある父・勝之助と母・おきくが柏崎へ移る二月二十五日から五月晦日にかけて見ることができる。勝之助は柏崎へ出立した二月二十五日（桑名日記一、一頁）、鐐之助は「ちゃちゃはどこへ行った」と平太夫に尋ね、「ちゃちゃは越後へ行った」と答えると「フウン…」とだけ答えてまた眠ってしまったと書かれている。その後、三月十九日（桑名日記一、二頁）におろくが誕生するが、この日を境にこれまで母にべったりだった鐐之助が大人しくなり決して母の側に近寄る事はなくお増にべったりになるようになったと記されている。

おきく卯の刻出産女子出生。扨鐐之助事昨日までもかかかかと申母の顔見候得は御乳ぼうぼうと申朝もねせ抜候跡にて目覚直にかかかかか申候故大案事いたし候処昨夕方婆々におばれもうなかぬはと申直に眠り九つ過頃本当に寝候得共目も不覚。今朝出生の泣き声聞き付けあれはなんだろうと申故あれはねんねの声と申候へは猫様だねへと申。至極おとなしく夫より決而母の側へは不寄。何事も婆婆と申候故案に相違おとなしく皆々歓候。

さらに三月二十九日（桑名日記一、三頁）には、鐐之助が朝目覚めた時母ではなくお増を呼ぶようになった事が書かれており、これに対して平太夫とお増の二人は安堵していた。

鐐児も母に不付寝起きにもばばばばと斗申故大安堵也。

そして母とおろくが柏崎に出立する五月晦日（桑名日記一、四頁）には、鐐之助は朝起きても二人について尋ねることはなく、いつも通り過ごしていたという。

けさめをさましてもさつぱりたづねずよしほどなくめをさましおばばのちちをなめそれよりあかのままおむすびをたべてつぼうときげんよく大さわぎあそぶおりふしなごやのかたよりみやのこたにあたり夕だちみゆるこのほうはふくじままであめみへそうらへどもこちらははらはらとしてふらずまたすこしたち多どのかたより夕だちかかり大ぶんのふりにて風もふきすずしくなる

以上の事から分かるように、鐐之助はおろくの誕生を境に母から祖母へと甘える対象が変わり、当時三歳という幼さにも関わらず、あまり両親と離れることに寂しさを感じている様子が見られなかった。その後の鐐之助は完全におばあちゃんっ子、おじいちゃんっ子になっていることがわかる。

もう一点しつけの事例は、鐐之助が中々食事をしようとしない時の対応である。天保十二年（一八四一）七月二十五日の条（桑名日記一、一八二頁）では、夕飯を食べている途中で眠くなってしまい横になる鐐之助。それを見た平太夫が、以下の様に言っている。

それやつのがはへる、しつほがでる、そんなざまではすもうとつてもおじいさの小ゆびでもなげつけてやる

これを言われた鐐之助は直に起きあがり平太夫の小指につかまるが、平太夫に軽くあしらわれてしまう。完全に目が覚めた鐐之助は慌ててご飯を食べ、平太夫に相撲を挑み、三番勝負で平太夫が負けてやっている。

二人のしつけのお陰か、鐐之助は優しい子供へと育っている。鐐之助が八歳の時に、お増が鐐之助の結婚を話題に出している。

…おはは云には、おばも今年はどふしても嫁にやらずは成まひし、鐐之嫁取にはまだ十年の余有おははも骨か折る、困つたものたと云たれは、暫鐐考て居たけなが、鐐おれが嫁取と、おははにらくさせて上るから、案事なんな、しかし嫁と二人ては淋しかろふて、おははおばばも御しいさも居るがや、鐐それならさびしくないからええと云た迚、腹筋よつて皆々笑ふたげな。

（天保十五年（一八四四）四月五日、桑名日記三、二一頁）

鐐之助が嫁を取れるようになるまであと十年はあることにお増は嘆いている。しかしそれを聞いていた鐐之助が、「おれが嫁を取っておばばを楽させてやるから、心配するな」と言ったのである。一方で、嫁と二人きりでは淋しいので平太夫とお増と一緒に住もうとしており、まだまだ鐐之助が子どもであることを窺わせる発言である。

上記の様に、時には悪さをして周りの大人を困らせていた鐐之助だが、同時にとても愛され大切にされていた心優しい子供でもあった。平太夫とお増も基本的に鐐之助の出した要求には答え、駄目な事は駄目と教えながら平太夫とお増は鐐之助の成長を見守っていたのである。

（2）鐐之助を見守る大人たち

教育社会史において、子供は「家」の子供だけでなく「村の子供」であるともされている。これは子どもが共同体の再生産に関わるため、村の大人全員で子供の成長を見守り、子育てに関わることで子供は多くの人と関わり、結果的に必要な知識や心構えを自然に学んでいたのである。[8]

鐐之助は毎日他の家の子供や大人と見世物を見に行ったり、遊びに出かけたりして沢山の人と関わりながら生活していた。ある程度一人で行

動できるようになる年齢に達すると、鐐之助一人で晩御飯に呼ばれて御馳走になりに行くことや、泊りに行くこともあった。

親戚の家に遊びに行った際には、鐐之助が来たことにとても喜んでいる様子も日記にのこされており、実にたくさんの人に愛されていたことがわかる。以下は天保十年（一八三九）九月五日の記事（桑名日記一、二〇頁）である。

まへ日佐藤へゆきさわぎつけるをわかいしうがかわゆがりおさつをかふてもろふたりくりをかふてもろふたりする。人おくれせぬゆへたれにもかわゆがられしやわせな小ぼうずなりあまりじまんするやうなれどほんにほんにあいきやうもの。此あいだしんやしきへおばばとゆきみんながいわすには鐐こはいきまがよくてかわゆうてならん鉄もにくうはなけれどげんきがなくておもしろくないとおつしやつたげな。

毎日佐藤の家へ遊びに行く鐐之助を若い衆が可愛がってくれると書いている。鐐之助の人見知りしない性格のおかげで愛されているのだと平太夫は記しており、愛嬌者だとしている。また、新屋敷の家の者も鐐之助が可愛くてならないようであった。

表2を見ると、一年間だけでも実に多くの場所に様々な人によって連れて行ってもらっていたことが分かる。平太夫やお増の用事に合わせて親戚の家に預けられることがほとんどだが、その次に参詣や催しを見せに行くことが多い。

また平太夫と二人で出かける場合の主な目的は、平太夫が鐐之助を遊びに連れに行き道中様々な場所へ連れていくか、角力や祭りといった町での催し物を見せに行く事が多かった。町中を散歩するときには御蔵やその他役所の建物へ連れていくこともあり、どこへ行くにも鐐之助は大喜びであった。

また、同行者に注目するとそれぞれの同行者ごとの行先として、渡部家の女性は家の用事の都合で鐐之助と外出することが多く、渡部家の人間と親戚が一緒に出掛ける時は、祭などの行事へ向かうことが多かった。親戚の男性のみで出かける場合は、鐐之助を遊びに連れていくときである。また、渡部家の同行者に多く登場するのが祖父母以外におよし（おなか）である。およしが鐐之助を連れて様々な場所に連れて行っていることから、家の中で鐐之助の面倒を見る役目を担っていたのはおよしだったのではないかと考えられる。

図2の地図の赤い丸がそれぞれの場所を示し、線で囲んだエリアが鐐之助の主な行動範囲である。こうして見ると、かなり広い行動範囲だったことがわかる。この他にも桑名の北に位置する多度へ参詣に行っていたりもしているので、正確にはもう少し広い範囲となる。

堀田吉雄氏の『桑名日記・柏崎日記民俗抄：注考』によると、渡部平太夫の家があったと思われるのは図3の左下庚申堂北とされる。[9] 現在でいうと新矢田、走井山の辺りではないかと考えられる。つまり、図2の地図と合わせて考えると、自身の住んでいる走井山周辺から桑名城下の方まで行っているという事である。

また、鐐之助は外に連れて行ってもらうだけでなく家に訪れる大人とも交流することが多かった。鐐之助の家には若い衆が仕事をもってやってくることや知り合いを呼んで食事を振る舞う機会があり、その時やって来た人たちに遊んでもらうこともあった。

天保十一年（一八四〇）一月十一日の記事（桑名日記一、四七頁）で、家に遊びに来た人と鐐之助の様子が記されている。

わかいてやいあそびにくる…（中略）…そのうちうたがるたがはじまる人々には女は郡のおくさん、おこん、おみち、おちか、男は重三郎、留五郎、武八、せんこ、さんこ、おかべ、金山のかね、五郎なり四ツすぎ鐐之助目をさましたところがにぎやかゆえ大そふにうれしがりわけかりたとるところへいつたりをりはをふるところへいつたりして大さわぎする

また、その五日後の十六日（桑名日記一、四七頁）にも、家に大勢人が居て喜ぶ鐐之助の様子が記されている。

表２　鐐之助の外出リスト（天保十年分）

日付	場所	目的	同行者	頁
2月29日	矢田河原	太神楽	平太夫	p.1
3月3日	江川		お増	
3月5日	新屋敷	預け	平太夫	
3月6日	新矢田庄屋	太神楽	平太夫	
3月17日		寺詣り	お増	p.2
	佐藤	預け	お増	
3月22日	八幡	角力	平太夫	p.3
3月23日	八幡	角力	平太夫	
4月2日	新屋敷		お増	
	佐藤		お増	
4月4日	片山		お増	p.4
4月9日	江川	法事	平太夫、およし	
	佐藤	預け	平太夫、およし	
4月10日	走井山	参詣	渡部家一家、郡かか衆、おすえ、およし	
	わらし神	石納	同上	
	金毘羅	参詣	平太夫	
4月20日	西河原茂松	蛍取	お増、その他	
6月6日	洗湯		平太夫、留五郎	p.5
6月10日	金毘羅	太鼓をたたきに行く	平太夫	p.6
	金毘羅		お増	
6月14日	天王さま		平太夫、お増、およし	
	おからすさま		平太夫、お増、およし	
6月16日	片山		お増	p.7
6月17日	鳥居	祭り	およし、隣のおこうさ	
6月22日	町家川原	のろし	お増、およし、おひささ	
6月23日	愛宕	虫送り	お増	
6月24日	善西寺	虫送り	お増	p.8
	おふみの裏	松明を見る		
	愛宕	参詣	平太夫、お増	
7月1日	町屋川	涼み、魚取	留五郎、重三郎、三こ、今村	
7月5日	福江町、七曲	石取祭り	おきんさ、およし	p.9
7月6日		石取祭り	おせん	
	洗湯		おせん	
7月7日	矢田町		留五郎	
	馬道	散歩	平太夫	
7月9日	走り山		平太夫	
7月16日	矢田町、やすだや、稲荷の遷宮屋敷、仏壇屋	散歩	平太夫	p.10
	鍋屋町	踊り、居合ぬき	平太夫	
7月17日	矢田町	ねり子	おせん	p.11
7月20日	洗湯		平太夫	
7月24日	長寿院、海蔵寺、浄土寺	参詣	おせん、およし	p.12
7月26日	新屋敷、浅野、一色町、七ツ屋の橋、外堀上原、長瀬、関根、野田、樋口、佐藤		平太夫	
8月3日	山岡	昼ご飯		p.13
8月4日	洗湯		平太夫	p.14
	佐藤		平太夫	
8月8日	新屋敷	預け	平太夫	
8月9日	佐藤		留五郎	
	根津		大寺のおみちさ	
8月10日	洗湯		お増、その他	
8月11日	佐藤	預け	お増	p.15
8月14日	八幡	参詣	平太夫	p.16
8月15日	八幡	参詣	お増	
8月16日	新屋敷		平太夫、およし	
	片山		新屋敷のおばばさま	
8月17日	春日	参詣	お増、おなか	p.17
8月18日			谷崎斧右衛門、その他	
8月21日	町屋川、水神、御用水の旗通り、新地、稲塚、片山、福江町	散歩	平太夫	p.18
8月23日	走井山、焔硝蔵、わらし神	参詣、墓参り	平太夫、おなか	
8月25日	新地		お増	p.19
8月27日	新屋敷	御礼、見舞	お増、おなか	
9月1日	佐藤		平太夫	
9月2日	洗湯		平太夫	p.20
9月7日	佐藤	預け	お増	p.21
9月8日	新屋敷		平太夫	
9月10日	栗本	紙包を頼みに行く	お増	p.22
9月11日	円通寺	焼跡を見に行く	おなか、手習いの子供	
9月12日	町家川原	遊ばせる	平太夫	
	橋普請の普請小屋	ご飯	平太夫	
9月15日	洗湯			p.23
	浄土寺	参詣	お増	
9月22日	佐藤		平太夫	p.24
9月24日	佐藤	預け	平太夫	
	洗湯		留五郎	
9月25日	新屋敷		平太夫	
10月1日	佐藤		平太夫	p.26
10月4日	新地	食事	平太夫	
10月5日	新屋敷	預け	お増	
10月8日	洗湯		お増	
	矢田町	提灯や大どぶろうを見せる	お増	p.27
10月10日	佐藤		お増	p.28
10月12日	鬼子母神	参詣	平太夫、お増、おなか、郡のかか衆	p.29
10月15日	一色町片山		お増	
10月17日	新屋敷		平太夫	
10月23日	冨田の浜		均平、留五郎、三こ	p.31
10月27日	森伸介の処		平太夫	p.32
	稲塚	見舞	平太夫	
	片山			
	米浅		お増、おこん、おなか	
10月29日	稲塚	見舞	お増	
11月2日	洗湯		おなか	
11月3日	洗湯		おなか	p.33
11月6日	新屋敷	預け	平太夫	
11月9日	松本		おこん	p.34
11月13日	江川	歓び	お増、おなか	p.35
11月18日	鍛冶町、市兵衛の処、京町、土橋、御蔵、柳原、新屋敷		平太夫	p.36
11月21日	片山		お増、おなか	
11月25日	円通寺	参詣	お増	p.37
12月4日	新屋敷		善蔵	p.39
12月7日	新地、稲塚		おなか	p.40
12月12日	郡		お増	p.41
12月18日		大神楽	平太夫	p.43
12月20日	大寺	餅つき	おなか	
12月22日	金山	餅つき	お増	
12月27日	佐藤	預け	平太夫	p.44
12月31日	長嶋屋	蕎麦を食べに行く	お増、おなか、郡のおかか、三こ、武八	

図２　鐐之助行動範囲
（表2を参考に電子地形図25000（国土地理院）を加工して作成）

鐐こかへつてみたところが大ぜいきているゆへうれしがりつかまひとめられぬやふにさわぐよるになりわかいしうもあそびにくるすごろくをりはうたかりたにてにぎにぎしく…（後略）

家に人が大勢いることに鐐之助は大喜びしており、手の付けられないほど騒いでいる。夜になると若い衆も遊びに来ており、双六や歌かるたをして賑やかである。鐐之助は家に人が来ることが好きだったようで、人が帰ろうとするのを止めようとすることもしばしばあった。

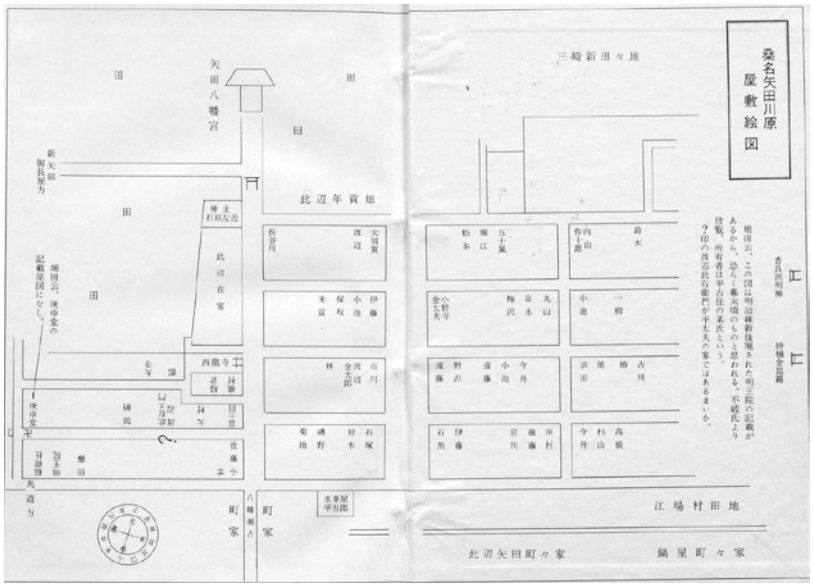

図３　渡部家の位置
（『桑名日記・柏崎日記民俗抄：注考』より）

（3）鐐之助の誕生日

『桑名日記』の中において、鐐之助の誕生日についての記述がみられるのは天保十年（一八三九）から天保十二年（一八四一）の三年間だけである。ちなみに『柏崎日記』の方では、毎年欠かさずお祝いをしている。その三年の中で特に力を入れてお祝いをしているのは、天保十一年（一八四〇）、鐐之助五歳の誕生日である。

天保十一年（一八四〇）十二月八日（桑名日記一、一一五頁）、鐐之助の誕生日当日。客は昼と晩でそれぞれ訪問しており、日記に書かれているだけでも総勢約二十人前後の人がお祝いに訪れている。贈り物は、扇子や下駄、唐傘、足駄、御菓子などである。

会食が終わると、平太夫は八幡へ参りおこわ一重と百文を供え、その後自宅で左近装束を着て神酒を供え子供たちに太鼓をたたかせ、鐐之助の「つふり」を幣束に貼り御守りと御神酒とおこわを供えている。鐐之助はこの時上下を着て草履をはいていた。この年以外の二年は、赤飯を炊いてそれにおかずがつくぐらいの食事をしているだけである。

二人からの贈り物については、天保十一年（一八四〇）二月五日（桑名日記一、五〇頁）からお増は鐐之助の誕生日に向けて着物を拵え始めている。

そのるすにおばばは鐐このきものをせつせとこしろふてをるやふやく四五日あとにそまつてきたちやかへしにぼうすじかた入はきよねんのつむぎのおびのあまりをいれるつもりなり。

その五日後の二月十日には、足袋も拵えている。この他にも平太夫は柏崎の方で大小を頼んでいる。その記事が『柏崎日記』の天保十一年（一八四〇）十二月二十四日の条（柏崎日記上、六五頁）に記されている。

暮過に駒蔵鐐之助の大小持て来る。柄巻く斗に致し置候処、蛯江立も廿六日に付、今日むりむり持て参り候。おきく申には、是をさして悦ふ所一目見度とて泪ぐむ。

遡る事二か月前、十月十日に平太夫が鐐之助に渡す大小について悩んでいる記事がある。（桑名日記一、一〇三頁）

鐐この大小の事かりるといふも心持わるし、といふて買ふもついえ、どふしたものであろふと、しあんたらだらのところへ、八郎見へ、かしわ崎より参りますなら御入用では御ざりますまへが、御目に懸ますとかみしもきの大小を見せられる。小のつか、すこしいたみあり。大の柄いたみなし。小づか小がたなつきにて二朱と壱匁にかふて置ましたが、いくらかのぞみてが御ざりますといふ。初めてさせるに、かりものもここちあしく、ふるものにても値段を聞はやすし。又あとではろふとも、かふておくつもりに八公にだんこういたす。

この時平太夫が購入した大小が出来上がり、十二月に鐐之助のもとに届いたのである。

近世において誕生日は、日頃の無事を喜び今後も息災であることを願う意味も込められていたと考えられている。下級武士の家庭ではその家の当主よりも、子供や孫の誕生日を中心に祝うことが多かった。また、『桑名日記』『柏崎日記』内でも行われていたように、厄除けの力があるとされる小豆の入った赤飯を炊き、酒や餅を出し親類や隣人を招いて会食をするという家庭的な行事であった。⑩

大小や上下については、誕生日の贈物ではなく七五三の儀礼の一つである五歳の男児が行う「袴着の祝い」に向けてのものだったのではないかと考えられる。袴着の祝いとは、幼児に初めて袴を履かせる儀式で、古くは男女の別なく三～七歳の間に行い、江戸時代以降五歳の男児に定着したという。幼児を吉の方角に向けて碁盤の上に立たせて、麻の裃を着せ左の足から袴を履かせ、初めて双刀を差させるという儀式であった。⑪

鐐之助五歳の誕生日が一番力を入れてお祝いをしていたのは、この「袴着の祝い」も一緒に行ったためではないかと考えられる。

以上、鐐之助の幼児期について見ていったが平太夫とお増は基本的に鐐之助の要求に答えつつ、駄目な事は駄目としっかり教えていた。さらに祖父母以外の大人や近所の子供たちと遊びに出かけたりすることで社会性を身につけていったのである。

第三節　教育の記事

第三節では、手習いを始めるための準備期間として基本的な言葉や数字を教わる鐐之助の様子について見ていく。

天保十年（一八三九）から、教育に関しての記事が見られるようになる。天保十年（一八三九）十月十八日（桑名日記一、三〇頁）に、鐐之助の発音について記してある。

御ぜんをばべたといふとかくたべるができずたべると一字ずついわせるとできるがはやくいわせるとばべるもつといそぐときはにごりをとつてはへるはへやう御ぜんいつぱいはへたなどといふとかくらりるれろができかねるやふすなり

鐐之助には「たべる」という発音がまだ難しいらしく、「ばべる」「はへる」となってしまう、らりるれろの発音ができないと平太夫は記している。しかし二か月後の天保十一年（一八四〇）一月二十六日（桑名日記一、四八頁）には、だいぶ発音が上達したようである。

大ぶんべろがたつしやになりいつとなくばべるもだべるといふやふになりなんぞといふとおかんこおかんこが口についているそれにゆび四本出してこれいくつといふゆへ四つといへば又五本だしていくつといふ五つといへばひつこましてげらげらわらひながらべろりといふて…（後略）

二か月前は言えなかった「たべる」が言えるようになり、さらには指で数字をあらわせるようにもなっているのである。

天保十一年（一八四〇）十二月十八日（桑名日記一、一一八頁）では、鐐之助が最近できるようになった事が記されている。

鐐児は六つまへに洗場へつれていつてくる。帰りに鐐云、あつちの

星さまはひかるねへと云。**あれは宵のみやじやう。あつちの三つあるのがさんたいぼし。**
そのしたにあるのが夜なかのみやう星さと云て聞せたら、がてんがいつたやら、フウ…ンと云。…まづ**大学やしきやふくよりそのたがわざるまでたいがいでき、**それより**そろばんのわりこえをしやべらせる**に七二かかの六と云たら、それはえちごのおかかとろくの事かへと云。みなみな大わらひいたす。それより**こちやかまやせぬをうとふ。お江戸日本ばしよりたかなわ夜あけでてうちんをまでうとう。のぼるはこねもできる。**そのほか大ぶんべろがまわるやふになり、**五音そふいうもちとづでき、よこよみ、あかさたな、はまやらは、などひとりでできる。**

平太夫が洗湯からの帰り道、鐐之助に星の名前を教えていたり、鐐之助が大学やそろばんのわりこえ、五音などを言ったり民謡を歌ったりすることができると書いてある。

天保十二年（一八四一）十二月十八日の条（桑名日記二、二七頁）では、寝床で平太夫が鐐之助に百人一首を読み聞かせる様子が記されている。

鐐洗湯より帰ると、おじいさ寝□寝□と言ゆへ抱て寝ると、おしいさ百人しゆをよみなんと言。夜前の通り天智天皇□言て聞せるとその通り鐐も読む。天智天皇秋の田の、てんちてんのふあきの田の、刈穂の庵の苫をあらみ、かりほのいほのとまをあらみ、我衣手は、わかころもては、露に濡つつ、つゆにぬれつつ。右之通かなの所は鐐之言所也。段々中納言家持迄読内、もふねふけが来て言あげぬ内にふふるなり。文字の通り段々声か小さくなるとねふる也。中納言家持鵲の渡せる橋におく霜の、ちうなこんやかもちかささきのわたせるはしにおくしもの、白きを見れは夜そ、しろきを見れはよそ、此通り段々声かひくくなるとふうんと言声とともにねふつてしまう也。

平太夫が百人一首を言うのに続いて鐐之助も復唱している。天智天皇から始まり中納言家持までいくと鐐之助は眠気に負け、復唱する声が小さくなっていく様子も記されている。

松川氏は鐐之助の教育について、「学習準備といっても、大人がいやがる子供に教えているのではない。それは、子供に学習要求がめばえ、大人に教えてくれるようにと求める態度が身についていることを意味する。また、学習の生活といっても、ただ書物を読み、習字をするだけではなく、友人とよく遊んでいる様子が描写されている。そうしたなかで、社会性を身につけていくのであろう。」[12]と述べている。桑名日記を見ていても、鐐之助は年齢に応じて少しずつ日々の暮らしの中で数字や言葉を学び、確実に教養を身につけていることが見て取ることが出来る。

第四節　鐐之助の手習

三歳から六歳にかけて、手習いを始めるために必要な学習は一通り済ませた鐐之助は、ついに七歳になると手習いに通い始めている。第四節では鐐之助が手習いでどんなことを学んでいたのかを見ていく。

（1）佐藤での手習い

天保十四年（一八四三）四月九日（桑名日記三、八頁）になると、鐐之助は手習いに行き始めている。この年鐐之助は七歳である。四月九日、この日に平太夫は鐐之助の手習い用に双紙を二冊拵え、親戚である留五郎のもとに手習いをさせに行かせようとしている。手習いではいろはの清書を行い、家では九九を練習している。

一般的な手習いのカリキュラムでは「書く事」が最も重視されていたという。[13]字の練習帳である「双紙」の横にお手本を置き、双紙が真っ黒になるまで何度も文字を書き練習をする。清書が出来た日には筆を一対貰っている（天保十四年（一八四三）四月十五日条、桑名日記三、九頁）。さらには、現代の子供と変わらず、紙に落書きをしていたのが見つかり平太夫とお増に手習いに行かされているシーンもある（天保十四年（一八四三）九月六日、桑名日記三、三七頁）。

文化八年（一八一一）に刊行された中村弘毅の『父子訓』で、中村は手習いの必要性について説いている。

七八歳のころより四民ともにまづ手習をなさしむべし。ものかくことは人たるもの。第一の芸にして有用有益たふとき事上なきものなりされば甚難きわざにて。人なみに書得ん事もたやすからずゆへに四民ともに我家業を習ふにも先だちてまづ手習をなさしむべきなり[14]十歳より後そろばん算術の事を学しむべし。[15]

と、七～八歳の頃から手習いをさせるよう主張しており、書くことが一番難しく、人並に書くことも難しいため手習いで書くことを学ぶべきだとしている。また、算盤や算術は十歳以後に習えばよい、としている。さらにその後には、そろばんが当時の人にどう考えられていたのかが記されている。

士たる人及富商の家などはそろばんはいやしとあざのやうにこころえしらざるを上品の人がらなりとするは大なるひがことなり。そろばんは数といひて六芸の一つにして貴賤となく習はずしてかなわぬわざにて家国天下を治るに有用のものうりたふとき人も必学びたるふべきなり[16]

武士や裕福な商人にとってはいやしいものと考えられていたようである。しかし、中村は、そろばんは六芸の一つであるとして貴賤問わず習うべきであるとしている。

八鍬友宏氏によると手習の学習課程は全国を見ても共通しており、いろはの書き取りから始まり、数字、漢字、単語、文章と続いていくと指摘している。日用文章までが文字習得のための基礎編であり、それを基にその後は個人に合わせた往来物の学習へと進んでいくのである。[17]鐐之助自身は、手習いに行き始めた四月九日からいろはの清書を開始し、その約一か月後である五月八日（桑名日記三、一四頁）にはいろはを一通り書けるようになっている。少し日付がとび、七月四日（桑名日記三、二六頁）には一から十まで清書が出来るようになったと書かれており、手習い開始から約三カ月で数字まで段階を進めたことがわかる。さらにその一か月後の八月五日（桑名日記三、三二頁）には、短文の清書に取り組んでいる。

（2）丸山での手習い

さらに、翌年の天保十五年（一八四四）二月四日（桑名日記三、九頁）から鐐之助は、丸山という人物のもとへ手習に行き始めている。きっかけは鐐之助の周りの子供が残らず丸山に手習いに行っていた事である。丸山での手習いはこれまで通っていた佐藤での手習いとは異なる点が二つある。一つは、当番があること。そして、二つ目は教育方法の違いである。

まず一つ目の当番制については、二月二十七日（桑名日記三、一四頁）の条で記されている。この日、鐐之助は朝一番に手習所へ行き、手習いに来る子供たちの机を準備し、手習いが終わるとその机を片付ける当番にあたっていた。この当番は三人でまわしていたことも記されている。

次の教育方法の違いでは、同じく二月二十七日の条に記されている。佐藤での手習いでは、若手によく教えて貰えたが、丸山での手習いは手厚く教えてもらえることはなく清書についても一人で書けるようにならねばならないという教育方針のため手を取り教えてもらうことはなかった。丸山では多くの子供が通う一般に言われる寺子屋だったのであろうと考えられる。

佐藤から丸山へと手習い先が変わり、教育方法が変わったことで鐐之助は清書に苦戦していたようである。天保十五年（一八四四）六月二日の記事（桑名日記三、三二頁）で、鐐之助が清書を一度で書き上げたと家にその清書を持ち帰ってきた時の話である。

鐐之助一度にて清書始而上り候迚、歓て持て来たれは、おなか云には、誰にか手を添て貰ふて書たのたろふ。いつても三度目か漸上るにと云と、鐐大立腹。佐藤ては皆んなか差図してくんなるから、能出来るけれとも、丸山ては誰もおしえてくれるものかなへ、能出来ぬ、此度は折角骨折て一度で上つたのに、手伝て貰つたなんて云から、是から清書は内へ持て来ぬと云て、顔色替ておこつたげな。御蔵より帰り候処、ひろけて有故、をや珍ら敷一度て揚つたと誉たれは、さつきおははか、手伝つて貰つて書て来たと云。もうふつつり清書は持て来ぬと云故、いやいや是は手伝なし、一人て書たのに違ひなし。なにおばが知るものかと云たら、機嫌能して遊ひに出懸る。

持って帰って来た清書を見たおなかが、誰かに手を取ってもらって書いたのだろうと信じなかった。丸山では誰も教えてくれず清書が良く出来ないから、今回一回で書けて嬉しかったのにそれを嘘だと言われたことに鐐之助は腹を立てた。最後はお増に褒めてもらったことで機嫌を直し、遊びに出かけている。おなかは、平太夫の実の娘である。

（3）藤井での手習い

丸山に通っていた鐐之助であったが、鐐之助自身も時々こぼしていたがやはり人数の多さが原因となり、指導の手が回りきっていなかったようである。そのため、三年後の弘化四年（一八四七）から藤井右衛門という人物のもとに新たに手習に行き始めている。下記は一月二十一日の記事である（桑名日記四、一五三頁）。

鐐之助是迄丸山へ手習に行候得とも餘り大勢にて、先生手廻り兼候様子に付、旧冬藤井為右衛門方へ当正月より五六人も参候趣に付、鐐之助も相頼候処、承ちに而今日より参候様申越れ候付、鐐召連藤井へ酒札壱枚持参頼て帰り、…（後略）

これまで丸山に居た頃の鐐之助は手習よりも遊びに熱心で、平太夫や勝之助に心配されるほどであった。しかし、藤井のもとに通い始めると家でも本を読んだり清書をする時間が増えているのがわかる。

また、藤井のもとに通い始めてから清書が上達したようである。勝之助が上達について触れている。

鐐之助清書先生替り候せい歟大分見事に出来相悦ひ申候。
（弘化四年（一八四七）三月二十二日、柏崎日記下、一〇〇頁）

これまでの指導環境から一転してしっかりと見てもらえるようになった事で、鐐之助も勉学に励むようになったのではないだろうか。

以上、七歳になると手習に行き始め、約半年で文字や数字を見に付け、八歳になると本格的な手習いへと移行し、時には指導方法の違いに苦しみながらも大学や論語と言った書物を使用した学習へと段階を進めていたのである。

第三章　平太夫とお増のそれぞれの役割

第三章では、平太夫とお増がそれぞれ鐐之助に対してどのような役割をもって接していたのか前章までの教育やしつけの様子を踏まえながら見ていく。

江戸時代において、育児の直接の担い手は女性が多かったが、男性も育児に関して役割を果たしていた。太田素子氏によると、男性は子育てについて記録を書残すことが多く、これは識字率の問題だけでなく、江戸時代は家の継承を価値と考える社会であったことも関係すると述べている。子育ては男性にとって公事であり、女性をよく教訓して良き子育てをさせることが家の最高責任者である男性にとっての責任とされていたという。[18]

また、貝原益軒は自身が記した教育書『和俗童子訓』第五巻「教女子法」の中で、女性の役割について述べている。女性は成長したら他の家に嫁ぎ夫に仕えるものであり、ただ従い情け深く静かであるべきであるとしている。また、朝は早く起き夜遅くまで起きていて昼寝はせず、家の事を怠ることが無いようにして、夫のために衣服を縫い、食事を作り、掃除をして、子供を育て、常に家の内に居てみだりに外へ出ることがないようにすることが妻として女性としての在り方である[19]としている。

第一節　平太夫と鐐之助

第一節では、平太夫の鐐之助への関わり方を見ていく。

鐐之助が渡部家の家督を継げるよう、教育を施し、社会性を身につけさせるのが平太夫の役割であった。これは前述したように、その家の最高責任者としての役割を平太夫も果たしたのであろう。

教育についてはこれまでも述べた通り、鐐之助が三歳になった時から、少しずついろはや数字を教え、五歳になると興味関心に応じて物を教え

ていった。七歳になると親戚のもとへ手習に行かせいろは、数字、文章の清書を一通り学習し、八歳になると丸山へ手習に行かせ大学や論語といった書物を使っての学習へと移行していっている。

鐐之助の教育についてはすべて平太夫が担っており、日記の中でも平太夫が鐐之助にあれこれと教えている様子が記されている。第二章第二節で前述したように、洗湯帰りに鐐之助に星の名前を教えていたり、寝床で百人一首を二人で唱えていたりしている。

本格的に物を覚えさせ始めたのは、五歳頃からであるが、その前にも平太夫は鐐之助に物を覚えさせようとしていることがある。その記事が天保十年（一八三九）十二月一日（桑名日記一、三八頁）であり、平太夫が鐐之助に物を覚えさせようとするが言うことを聞かないため苦労している。

ものをおほへよふとてかなにをいふてきかせてもくどくきくにはこまる

この時にはまだ鐐之助の中で学習・知識の収集に関心がなかったため、言うことを聞こうとしなかったのだろうと思われる。以上から少し時期が早かったために困らされながらも、平太夫は鐐之助に物を教えていたことが分かった。

次に社会性については第二章第二節で述べたように、家に訪れる来客との交流や親戚・他の家の子供など、鐐之助は毎日といって良いほど多くの幅広い年代の人間と交流していた。家やその周辺での交流だけでなく、時には祭りや行事を見せに行った先で人と交流し、遠出をした先で人と関わることもあった。そのため、日記の中で度々平太夫と鐐之助、二人で出かけている様子が記されている。天保十年（一八三九）八月二十一日の記事（桑名日記一、一七頁）では、鐐之助を遊ばせに町の様々な所へ行っている。

ひるより町や川へ鐐こあそばせにつれてゆきはしのながれたところを見るに北のはしの南のあと拾けんよ南のはしの北のあもと拾けんほどながれまんなかのはたけはさつぱりかわらになり川は北のはしのまんなかまつすぐにながれはしよりかわらへおりるよふはしがかかり南のはしも又かわらより橋の上へあがるやうに川ふね二そふありそのふねのあるところへ鐐こつれゆき候ところ出たりはいつたりとものところよりとびおりたり小いしをひろひとものところへもつてあがりそのいしをなげたりまことによねんなく一ときほとあそばせそれより南のはし江上りなをのつつみ上りそれよりそろそろもどりやすながにてさつまいもをかふてやり又すいじんのほうへつつみどふりふらふらのぼりすいじんのまへにてやすみ御用すいのはたどふりしんちへ出うすいのよこにて鐐こいふたいそふくたびれたからやすまふねへといふて道ばたへこしかける。しんちの子ども見ていてわろふそれよりいなづかへよりてつぼうと大さわぎあんもとおせんをたべるそれより片山へよりかへる。ふく江町にわとり七八わひよつ子まじりおるをりやうてをひろげつかまへるとておいまわすを水谷よ助が見ておかしがりにこにこわろふてゆく

平太夫と鐐之助の外出の特徴は、一回でいろいろな場所に行くということである。その証拠に、その二日後の八月二十三日（桑名日記一、一八頁）には、平太夫と鐐之助、おなかの三人で様々な場所に出かけている。

ひるすぎより馬道のこんやへもめんいとをもつてゆきながらおなかと鐐こつれてはしり井山よりえんしやうぐらわらじがみへ参りむすびをたべさせそれよりひろしさの御はかへ参り岩崎のはかはひろしのはかとむかひあわせなり…（中略）…それからやうしゆあんへ出てつぽうばへより七つすぎかへる

二つの記事から分かるように、多くの場所へ出かけることによって様々な人と出会い、出会った人達と鐐之助は交流して社会性を身につけていたのである。

以上、平太夫の役割は教育と人との交流の機会を与えるという大きく二つであり、その役割の中で平太夫は着実に鐐之助への教育を施していったのである。

第二節　お増と鐐之助

第二節では、お増が鐐之助に対してどのように関わっていたのかを見ていく。

お増が養育者として果たした役割は、しつけと日々の世話が大きく占めていたように見える。平太夫が外交的な側面を育てていたのならば、お増は内面的な部分を育てたと言えるだろう。

そのため、日々のお増の鐐之助への関わり方を見ていると大きく二つの役割がある様に見える。一つは母親的役割、もう一つは「家」を切り盛りする者としての役割である。

まず一つ目の母親的役割としては、日頃平太夫が蔵勤めで家を留守にしている間、家で鐐之助の相手をしながら自身の仕事をこなしている。お増の主な仕事は、洗濯や針仕事、食事の準備といった家事に加え使いの役目や、機織りなどであった。これらの仕事を日々こなしながら、鐐之助の世話もしていたのである。

平太夫が家にいる時間はとても少なく、出勤が短くて一週間、長いと三週間毎日出勤することもあった。そのため、お増は朝から晩までほぼ毎日鐐之助に邪魔されながら過ごしているため、平太夫が休みの日はお増が大喜びしているのである。

天保十一年（一八四〇）九月十六日（桑名日記一、九八頁）では、お増が平太夫の休みのおかげで鐐之助に邪魔されずに済むと喜んでいる様子が記されている。

おばばがいふ。やれやれけふはおじいさが内でよかつた。鐐こにあさからばんまでいじりぬかれると、ばんがたには気らちもないやふにほうほうするやふだに、まあけふはおじいさとあそぶでおばばはらくじやとよろこぶ。

次に、「家」を切り盛りする者としての役割について見ていく。特に注目したいのは、お増が渡部家の者すなわち家中の者であるという意識を持っている点である。

お増の「家」への意識を感じさせる記事が二点あり、その意識はどちらも鐐之助の要求に対して叱る際に見られる。

一つは、天保十一年（一八四〇）十月二十七日（桑名日記一、一〇八頁）の記事である。

鐐ことなりの二男につれられて、隣の子供とも四人つれにて、町屋川の辺へゆき、昼時分かへる。けふは一度も佐藤へ送てくれといわず能一人あそびする。八つ半ごろ表より飛込ひけしのまねするから、ちいさなはしごをたつた今こしろふてくれと云て二階へ上る。おばばにこしろふて貰へと云。又おばばの所へ行ねだる。おばばが云には、どふして其様にじきにできるものか、はしごがなんに成。それでも御代田の平さが持て居なるから、たつた今拵ふてくんなへと云。ををそんならこしろふてやるからな、そのはしごを以て馬道へいつてしまへ、**家中のものが火消の真似なんぞするものでなへ**、紋の付たべへも大小もかみしもやることはならぬが、それでもええか、はしごがほしくばこしろふてやるかどふだと云れて大にこまり、泣しやつくりしながらねふる。…（後略）

お増に飛込火消の真似がしたいから、小さい梯子を拵えてくれと頼む鐐之助。しかし、お増は「火消の真似なんか家中の者がするものじゃない」と言った上で、「梯子を作ってやってもいいが、その代わり、鐐之助の紋付も大小も上下もやらないがいいか」と交換条件を出している。鐐之助はこの後、飛込火消の真似は諦めている。

交換条件で出されている紋付や大小、上下は鐐之助の五歳の袴着の祝いに向けて準備しているものである。

二つ目は、第二章第二節でも挙げたが、天保十一年（一八四〇）十月四日（桑名日記一、一〇二頁）に、長吉の真似をしようとした鐐之助がお増に叱られている記事である。

ひるじぶんにおばばをねだるには、長吉のまねをするからどうぞかみにすじひいてくんなへ、石をぜんぜにして長吉のまねするからどふぞといふゆへ、**かちうのものは町のもののまねなんぞするもので**

なへ、鐐それでも金山のてつさがしなつたもの、おばばそふおばばのいふことをきかぬと、御馬にのせてえちごへやつておろくをつれてきておばばがだいてねるはといふたら、おつなかほしていたが、わああとなき出したげなが、うそだうそだ鐐はおとなしいもの、えちごへやりはせぬになきやるなといふたら、じきにきげんをなをしたげな。

長吉の真似がしたいから髪に筋を引いてくれと鐐之助はお増に頼むが、お増は家中の者が町の者の真似をするものではない、と叱りつけている。

以上二つの記事からわかるように、お増は渡部家は家中、どちらでも共通して、「家中の者」という言葉が出て来る。「家中の者」つまり藩士の家柄であることを意味する。そのため、武士の家系である以上、町の者と一緒に遊ぶことはあっても町の者の真似をすることは許さなかったのである。そして「家」の意識をもって叱るのは、いつもお増の役目であった。

中野節子氏によると、武士階級に属していた女性たちは前述した貝原益軒が示していた女性像の様にただ縛られ付き従っていたわけではなく、中・下層の武士の家では自ら行動し教養を持つ女性も珍しくなかったという[20]。そのため、お増が上記のように家中の者であるという意識を持っていることも決して珍しい事ではなかったと言える。

おわりに

ここまで鐐之助の幼児期から手習いまでの時期を見て来たが、鐐之助は多くの大人に見守られながら育ってきたことがわかった。平太夫とお増の二人も鐐之助の要求には答えつつ甘やかすことはなく、悪いことはやっていけないとしっかりと教えている。そして手習いに向けて少しずつ教育を始め、鐐之助の興味関心に合わせて物を教えていった。

手習いについても一つの教室に通い続けるのではなく、鐐之助の学習進度や相性に合わせて場所を変えている。鐐之助の様に手習いの先生を変える事が一般的であったのか定かではないが今後考察の余地がありそうである。

平太夫は鐐之助に教育を施し、社会性を身につけさせることが役割であった。対してお増は、鐐之助のしつけと日々の世話を担っていた。家事をしながら鐐之助が健康に成長できるように見守っていたのである。どちらも己の役割を果たしながら、鐐之助が無事に成長できるよう養育していたのであった。

① 渡部政通『桑名日記一～四・別冊』（沢下春男、一九八四年、国立国会図書館デジタルコレクション、https://dl.ndl.go.jp/pid/9571301）
② 佐藤志帆子『近世武家社会における待遇表現体系の研究 ―桑名藩下級武士による『桑名日記』を例として―』和泉書院、二〇一四年
③ 皆川恵美子「『桑名日記・柏崎日記』に見られる子どもの遊び―下級武士の子どもにみる遊びの諸相」（日本保育学会大会準備委員会、『日本保育学会大会第四二回研究論文集』、一九八九年）
④ 松川由紀子「桑名日記・柏崎日記にみられる近世庶民の家庭教育について」（『幼児の教育』七五巻四号、一九七六年）
⑤ 渡部政通『桑名日記　別冊』（沢下春男、一九八四年）
⑥ 前掲注⑤
⑦ 中村弘毅『父子訓』（一八一一年、国書データベース、https://kokusho.nii.ac.jp/biblio/100387577/20?lng=ja）
⑧ 辻本雅史「近世社会における教育の多様性」（辻本雅史・沖田行司編『新体系日本史16　教育社会史』山川出版社、二〇〇二年）一四七頁
⑨ 堀田吉雄『桑名日記・柏崎日記民俗抄・注考』（伊勢民俗学会、一九六九年、国立国会図書館デジタルコレクション、https://dl.ndl.go.jp/pid/9569198）
⑩ 鵜澤由美「近世における誕生日：将軍から庶民まで ―そのあり方と意識―」（『国立歴史民俗博物館研究報告』、第一四一集、二〇一六年）
⑪ ブリタニカ国際大百科事典　小項目事典、https://kotobank.jp/word/袴着-113522、二〇二四年一月四日閲覧）

⑫ 前掲注④
⑬ 井出草平「江戸時代の教育制度と社会変動」（『四天王寺大学紀要』五七巻、二〇一三年）
⑭ 前掲注②一四頁
⑮ 前掲注②一八頁
⑯ 前掲注②一九頁
⑰ 八鍬友広「近世民衆の人間形成と文化」（辻本雅史・沖田行司編『新体系日本史一六　教育社会史』山川出版社、二〇〇二年）一七一頁
⑱ 太田素子『江戸の親子 ―父親が子どもを育てた時代―』（中公新書、一九九四年）
⑲ 貝原益軒『和俗童子訓』第五巻（目黒書店、一八九三年）
⑳ 中野節子「江戸時代の『家』と女性」（『市史かなざわ』巻三、一九九七年、https://kanazawa-u.repo.nii.ac.jp/records/1058）六六～六七頁